

# 矢島 稔さん

(昆虫生態学者)

## 可愛い・なつくだけの生きものでいいのですか？

子供は外で遊ぶもの——というのは残念ながら昔の話。多くの子供たちは、携帯電話やゲーム機器に夢中だ。一概にそれが悪いこととは言えないまでも、生きもの離れが進んでいることは明らか。そのことを危惧する昆虫生態学の第一人者・矢島稔さんに、生きもの離れを加速させないためのヒントを聞いた。

### 虫を怖がる大人たちの罪

——NHKのラジオ番組「夏休み子ども科学電話相談」の名回答者として、長年活躍しておられますが、子供たちとの対話から、何か感じることはありますか？

実験に基づいた疑問が減ってきましたね。いろいろな生きものを見て、不思議に感じたことを聞いてくるのはうれしいのですが、彼らの多くが見たものはテレビやネットで見た生きものなんです。

たとえば昆虫図鑑には、虫を上から見た写真しか載っていません。虫の体の裏側やいろんな部分をくまなく見て、初めて虫の全体像や、どんな種類なのかがかかるのですが、実際に捕まえたり、飼って観察する経験がほとんどないから、非常に限られた知識しか持たなくなってしまう。

今年の質問では、「世界から蚊がいなくなったらいいと思うのですが、なぜ蚊はいるんですか」が印象に残りました。なぜそう思ったのか、理由を知りたくて「今年の夏はやっぱり蚊に刺されたの？」と聞くと「違う」と言う。「君は今まで蚊に刺されたことはあ

るのかな？」と聞いたたら「たぶん、あると思う」と(笑)。「蚊にいったい刺されて困っているから蚊はいないほうがいい。でもそうなったらどうなるんだろう？」という流れだったら、まだしもわかるのですが、これが違うんだ。もしかししたら、殺虫剤のCMや周囲の大人たちが蚊を嫌っているのを見て、「こんなに嫌



●やじま・みのる 一九三〇年東京都生まれ。東京学芸大学生物学科卒業。五十七年、豊島園の昆虫生態館を創設し、六一年には東京都多摩動物公園の昆虫園の設立に着手。六四年昆虫誌『月刊インセクタリウム』を創刊、八七年同園園長に就任。その後、東京動物園協会理事などを歴任し、九九年よりぐんま昆虫の森の園長。著書に『ハチのふしぎとアリのなぞ』(偕成社)。近く『日本の昆虫館(仮)』(東海大学出版会)が刊行される。

われているんだったら、いなくてもいいんじゃないか」と疑問を感じたのかもしれない。

質問にはまず、蚊が媒介する病気のひとつ、マラリアについて話しました。「蚊が一匹もいなくなったらマラリアはなくなるだろう。この病気のために命を落とす人がいなくなるのはすばらしいよね。でも蚊をエサにしているトンボや一部のカエルはどうだろう？ エサがいなくなったら生きていけない。トンボやカエルがいなくなると、それらをエサにしている野鳥など他の生きものも同じようにいなくなってしまう。そうやって命の環がどこか一部でも壊れると、いずれ人間も生きていけなくなるのは確実だ」

もし子供たちが、人間に害を及ぼす虫は絶滅してもいい、という発想を持ったまま大人になったらこれは大変です。これほど自分勝手な考えはない。人間も食物連鎖の一部であって、自然界の一員でしかないのですから。

——都会に住む子供は虫や植物に触れる機会が少ないから、どうしても本やテレビに偏りがちなんでしょうか？

それも大きい問題ですね。東京はビルばかりで緑が